

# ジヨブスタジオリ勢の取り組み

## 「障がいがあっても、自分たちで仕事をづくり、地域を支えよう。」

福祉と農業を連携させて、ブルーベリーやブラックベリー、ワインぶどうなどの栽培・加工・販売を行うジヨブスタジオリ勢。その取り組みは多くの人の共感とサポートを呼び、伊勢市の観光産業への貢献にまで幅を広げようとしている。

「障がいがあっても、自分たちで仕事をづくり、地域を支えよう。」

### 自分たちで仕事をつくる ジヨブスタジオリ勢の支援

収穫したブルーベリーを出荷するための仕分け中に、「人差し指で触っただけで分かるよ」と商品として見極めを得意げに話す寛太さん。パックに詰め終えた翼さんは「たくさん売れて、いろんな人に食べてほしい」と笑みをこぼす。コソコソと作業にあたるのは障がいのあるメンバーたち。集中力が切れそうになると「今日は作業早く進んでるよ」と指導員が声をかけて見守る。

ここは福祉施設ケアプロフェッショナルが運営するジヨブスタジオリ勢の屋内就労場。やりがいを感じられる仕事を自分たちで作り上げたいと、その自主独立の意思を「ジヨブスタジオリ仕事工房」という名

に込めた。

屋外の就労場として宮川下流域に広い農場がある。ブルーベリーやブラックベリー、ブドウの栽培を行い、じゃがいもやサツマイモも畑に植わる。自分たちで育てた農産物には愛着が湧き、販売への意欲にもつながる。今後はジャム製造やワイン醸造など、地域の特産物になるよう加工にもチャレンジ。福祉と農業、それに観光との連携を目指す。

「仕事を分担し、農場だけと決めてしまえば、その方が効率はいいのでしょけれど、それでは福祉施設としての意味がない。さまざまなことができるようになってほしいので、基本的に担当分けはしていません。彼らが将来、自分で生きていける一歩をつくれるかどうかが大切なので」と、ケアプロフェッショナル



代表の岩崎直明さん。

一般的に就労支援施設は下請け業務が多いけれど、ここでは自社栽培、自社加工にこだわりの、やってみたいことを実現しようと、スタッフ一丸となって努力する。スーパーの店頭にも、ブルーベリー



「伊勢わいん特区」認定のブドウ畑で、ケアプロフェッショナルの岩崎直明社長（左）と中里佳寛副社長。障がいの雇用環境を改善していこうと奮闘する



ブドウの実と梗（茎）を分ける作業。この後、実を潰して、果汁を搾り取り、ワインを仕込む。地ワインの醸造で、観光産業にもつなげる



ワインぶどうを植樹する隆介さん。全てのはじまりはここから



機械の扱い方の指導を受けて、草刈り作業をする慎乃祐さん



「放課後の家」の生徒が慎重に収穫作業体験

が並んだ。スーパーサンシ株式会社農産課で仕入れを担当する齋藤千浩さんは、「大粒でジュシー、甘さも十分です。大きいと味がぼやけてしまうことが多いのですが、ジヨブスタジオリ勢のものは味もいい。店頭と並ぶのを待つリピーターさんもいます」と声を弾ませ、地域福祉と関わる商品の販売に、手応えを感じている。

通所する女の子侑芽ちゃん存在があつたそうだ。侑芽ちゃんは力加減ができずおやつを握り潰してしまうことがあり、この子にできることを考えたとき、ブドウをつぶすワイン作りなら関われるのではないかと思い至り、ブドウ栽培に着手。農場の名前を「ゆめファーム」と名付けた。「障がいがある子たちの、できることを増やすためにサポートするのは当然というのが、僕の福祉の原点」。岩崎さんは行政や地域の民間企業とも連携を図りながら、障がいの有無など関係なく支え合える社会の創出を目指し、挑戦する中で交流の輪を広げている。

### 地域と連携して思いを共有 ワインづくりで観光支援も

農場はもともと耕作放棄地の畑などで、およそ20人の地権者から借りているが、これには伊勢市農業委員の森北雅博さんが尽力してくれた。「農地を借りるのがこんなに大変なのかと、最初はそこらにぶつかりました。みなさんに声を掛けてくれた森北師匠のおかげです」と岩崎さんが



1.森北さんはトラクターなどで作業をサポート  
2.取り組みに共感し駆けつけてくれる友人の松本さん、堀畑さん  
3.アコヤ貝を堆肥としてリサイクルすれば、資源の循環にもつながる

感謝すれば、森北さんは「荒れた土地は草が生えるだけじゃなくて、木も大きくなって鬱蒼とし、テレビなどが不法投棄される場合も。こうやって畑としてよみがえったのはうれしいことです」と返す。

農業と福祉が連携した取り組みは、伊勢市にとっても期待値の大きい動きであり、今年3月末の「伊勢わいん特区」認定がジヨブスタジオリ勢の機運を高めている。特区認定により、伊勢市内でワインぶどうを原料とした果実酒を製造する場合、酒税法の最低製造数量基準が、年間6キロリットルから2キロリットルへ引き下げられるからだ。

「伊勢には日本酒や焼酎、ビールに地物がありますが、ワインはなかったんです。外国人観光客の方にも喜ばれますし、伊勢のブランドとして定着できれば、その環境整備の一つに、特区認定の取得が必要と判断しました」と話すのは、伊勢市産業観光部の宮本晃理事。また、伊勢市議会議員の宮崎誠さんも「障がいのある我が子の一父親として岩崎さんの熱意に惹かれ、自分も何かできないかと賛同しました。自立を手助けし、農福連携から観光産業にも携わることで、ここで働けて良かったと思える事業になれば」と話す。

また、この取り組みに共感した御木本製菓は、畑の土壌改良にカルシウム豊富なアコヤ貝の貝殻を提供している。「障がいがある人々の仕事づくりや伊勢の特産品づくり、それにSDGsにも貢献し、関わることで幸せになれるプロジェクトです。」



左から齋藤さん、森北さん、宮本理事、岩崎社長、前山取締役、宮崎議員、御木本製菓 松本本部長

今後もおいしいものを作れば、動きは加速していくでしょう」と同社の取締役・前山薫さん。岩崎さんの福祉にかける思いを軸に多くの人が繋がり、連携の新しい風が吹いている。

(株)ケアプロフェッショナル  
伊勢市村松町1375-6  
☎0596-38-1550  
http://care-pro.co.jp